Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

小松左京研究ーＳＦ文学と日本像の再構築ー

徐，翌

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2023-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7945号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007945

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目

小松左京研究―SF 文学と日本像の再構築―

氏　　名　：　徐　翌

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）　梶尾文武　准教授

（副）　樋口大祐　教授

（副）大橋完太郎　准教授

要　旨

一九六四年、小松左京は自身の文学観、国家観を集約した評論「廃墟の空間文明」を著した。一九六四年は『日本沈没』の構想が始動した時期でもある。新幹線開通や東京オリンピックの開催も記憶されるこの年は、小松左京のＳＦ文学を紐解いていく重要な節目として捉えるに相応しい年である。ところが、このターニングポイントを迎えるまで、小松左京はまだ揺れ動く青春時代を過ごさなければならなかった。

本論文の第一部では、一九四九年から五三年までの京都大学在学中、思想上では「共産主義と実存主義」に塗れ、行動上では「空想と文学」に揺れた五年間の動向に注目する。当時、小松は「モリ・ミノル」名義でＳＦ漫画を掲載出版し、左翼活動にコミットする傍ら、高橋和巳と交友を深め、「京大作家集団」「土曜の会」「ＡＲＵＫＵ」「現代文学」などの同人雑誌に参加し、実名・小松実の名のもとで純文学習作の発表を続けた。あらゆる作家にとってそうであるように、初期習作は、作者の内的感動や自己告白を最も露骨に伝え、その文学の根源的思想傾向を示す。京大時代の小松作品もまた、漫画と活字のいずれも、のちの小松文学の根底に流れる思想の面影を表出している。第一部は、この時期における小松左京の文学同人、漫画活動を調査し、彼がＳＦ文学を書き出すまでの思想的な準備＝ＳＦ文学創作の原点を検証するとともに、その作業を梃に同時代の日本文学・社会思想を把握したうえで、当時の小松が描画した日本像について考察する。

京大を卒業した一九五四年から、「廃墟の文明空間」を発表した一九六四年にかけての十年間で、小松は様々な仕事をしながら、同人誌活動を通じて自身の文学観を整理し、ＳＦの方法論に目覚めた。この小松ＳＦ文学の始動期にあたるディケードに関する検討として、森下一仁による評論「小松左京の「文学」―迷路の果てに」（『小松左京マガジン』四九巻、13・5）が参考となるので、詳しくはそちらに譲りたい。純文学の試作を『対話』に発表していた小松は、六三年に開催された第二回ＳＦコンテストにおける「受賞の言葉」で述べたように、「いわゆる“純文学”から、足を洗いたいと思ってＳＦを書き出し」、それによってはじめて「文明批判」を書くことができるという確信を深めてゆく[1]。小松のＳＦ文学の出発を正式的に告げた作品が、触れた『地には平和を』と『日本アパッチ族』である。この二作の作品分析に加え、小松が同時期に注力した『対話』の同人誌活動および商業誌（例えば、『団地ジャーナル』『別冊サンデー毎日』）での執筆活動・台本創作などについて整理・検討を行うことが、本論では十分に扱えないが、今後の課題となろう。

本論の第二部は、小松左京のＳＦ作家としての創作活動が本格的にはじまる一九六〇年代に焦点を当てる。日本が経済高度成長期を迎えて凄まじい繁栄を見せた時代であり、世界的にも情報社会が高度化しつつあった。そのような時代の中で、「科学的認識」や産業技術に強い関心を抱いていた小松は、未来に時代を設定し、未来世界を描くＳＦ小説家としてデビューを果たすと同時に、彼は“ＳＦ作家らしく”未来をめぐる活動を多様に展開していく。

小松左京は単に文学にとどまらず、京都大学人文学研究科（以降、略称「京大人文研」を用いる）の知識人・学者たちが陣営を構えた「朝日放送」のＰＲ誌『放送朝日』（全二五九号、75・12 に終刊）に与し、小説執筆の傍らに、一九六四年七月に「万国博を考える会」を発足させ、それが六六年に「未来学研究会」へと成長していく。翌六八年に「日本未来学

会」にコミットするなど日本未来学の成立にも一役を買った小松は、学者だけでなくメタボリストやクリエーターたちとも盛んに交流し、学際的な活動に勤しんだ。そして、そのような領域横断的な活動は、彼が一九七〇年に開催された大阪万博でサブプロデューサーとしての参加に繋がっていく。さらに、小松の歴史、実存、未来などの一貫した問題意識の下で、『未来の思想』（中央公論社、67・11）も出版されている[2]。

実際、この日本ＳＦ文学界を代表する作家の著作を刊行順に並べれば一目瞭然だが、それらは一九六〇年代と一九七〇年代に集中的に産出されている。前掲『未来の思想』も含めて、小松左京の「三大思想本」として並称されるのが、『地図の思想』（講談社、65・11）、『探検の思想』（講談社、66・11）である。それは、京大人文研の面々と親しい小松が、『放送朝日』の企画に応じ、一九六三年九月から、六六年九月にかけて手掛けた「エリアをゆく」（『放送朝日』）という紀行文連載を単行収録した二冊である。

この当時、今西錦司や梅棹忠夫など京大人文研の学者にリードされる日本文化人類学の浸透と並行する形で、「神話・古代史ブーム」が訪れていた。なおかつ、東京オリンピック前後に推進されたインフラ整備と国土開発の後押しにより、ジャーナリズムにおいてルポルタージュが多出した。「エリアをゆく」は、こうした背景下で誕生した連作である。小松は『古事記』や『日本書紀』または各地の「風土記」などに注目し、日本の土地を足で感じながら、古くから日本に伝承される古代神話を自作に取り入れ、歴史から現代における意味を探ることを試みる。ただし、そこでＳＦの手法を用い、「ＳＦ仕立て」にしたところが、小松の特色である。それらの作業もまた彼の日本（文化）論、文明論の一角を占めている。

本論の第三部では、小松の代表作『日本沈没』を論ずる。本作が出版された一九七三年、日本は高度経済成長期の終焉を迎え、世界的にも石油ショック（一九七三年）の影響により経済的な先行きが不透明さを増し、不穏な情勢を呈した。六〇年代のマスメディアで喧しく盛り上がっていた「バラ色の未来」にとって代わって到来したのが、「終末論ブーム」であった。そんな中で上梓された五島勉『ノストラダムス―迫りくる一九九九年七の月、人類滅亡の日』（祥伝社、ノン・ブックス、74・11）は、刊行後まもなく映画化されるなど、『日本沈没』と同じコースを取ったベストセラーである。これらの書物は起爆剤のように「終末」の気分をより一層増し、不穏な情勢を助長した。『日本沈没』もまた、「終末論ブーム」の一環をなしているのである。

『日本沈没』の再読にあたって、終末的な要素が前面に押し出された結果、長年終末論的な文脈で読まれてきた本作を再評価する。『日本沈没』の中に埋め込まれた「核」のイメージに着目し、新しい「政治小説」としての再解釈を試みる。本作出版当時の石川喬司の指摘を継承しつつ、テクストの具体的な引用に基づいて作品に潜在する「核」のモチーフを検証したうえ、小松文学の核心に潜む「廃墟」の方法論を実証的に論じる。それと同時に、坂本義和や大江健三郎の「核時代」をめぐる言説を参照しつつ、それらと小松との共通点と差異を指摘し、七三年前後の社会思想・言説動向に小松を位置づけてゆく。また、『日本沈没』の語り手をめぐってテクストの分析に関しては章を改めて踏み込み、ナラトロジーの視角から本作を捉え直す。スケールの壮大さゆえに俯瞰的な視点が中心を占めるという印象を与える『日本沈没』だが、実際には、登場人物に寄り添う局限的な語りが配置されている。そのことの意味を明らかにすることが、ここでの狙いである。

このように一九七〇年代に入って科学技術に支えられた明るい未来像が虚像であると認識された背景には、公害問題や環境破壊などによる科学への不信感の高まりが挙げられる。革命運動も、よど号ハイジャック事件（一九七〇年三月三一日）やあさま山荘事件（一九七二年二月一九日～二月二八日）が社会に衝撃を与え、民心の乖離の決定打となる。安保闘争後の左翼勢力の退潮に合わせて、いわゆる政治からサブカルチャーの流れにコミットする若年層が拡大した。そうしたなかで流行したのが、ノストラダムスの大予言に代表される終末論である。

最後に第四部では、終末論がささやかれた一九七三年の世相が汲み取られた総合雑誌『終末から』（全九号、筑摩書房、73・6～74・10）の解題を行なう。本誌創刊時からの参画者の一人に、小松左京がいたことは、また彼の作品『日本沈没』が終末論ブームの流れにくくりこまれることにあずかるところが大きい。本誌は、大手出版社である筑摩書房から発刊されたにもかかわらず、短命だったこともあり、現在では稀覯性が高い資料であると言える。今後の小松左京研究の効率的な展開に寄与できる基礎資料を整備すべく、本誌の傾向と論調およびその参与者の一人である小松の活動について、確認しながら整理を加え、本誌の執筆者一覧を付す。

以上、本博士論文の問題意識と構成を概観してきた。小松左京はどのような思想と方法のもとに「戦後日本」を捉えていたのか。この作家の想像力に戦争の「廃墟」はどのような影を落としているのか。そして、ＳＦ文学のなかで、小松が幻視しようとした、来るべき「日本像」はいかなるものか。時代背景を踏まえつつ『日本沈没』を中心に作品解釈の更新を試み、こうした問いにアプローチすることが、本博士論文が目指すところである。

---

[1] 『ＳＦマガジン』（63・1）に掲載されている、小松左京「お茶漬の味」が受賞した際の発言から引用。その掲載以降、小松はほぼ毎月のように同誌に作品を発表する。

[2] 『未来の思想』を俎上に乗せ論じる先行言説として、藤田直哉による評論「「二十一世紀に小松左京を読むということ――『未来の思想』再読」」（『小松左京マガジン』三九巻、イオ、10・11）が参考となる。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	徐　翌
論 文 題 目	小松左京研究―SF 文学と日本像の再構築―

要　　旨

本論文は、日本SF第一世代を代表する作家・小松左京を考察対象とする文学研究である。序章「「廃墟の空間」から生まれる想像力」は、研究の現状を展望しつつ小松の想像力の原質を戦後の「廃墟」の記憶との関わりから捉える。これに続き、本論は作家活動の時期に即して全四部から構成されている。

第一部「SF作家・小松左京への変貌（一九五〇年前後）」は、これまで本格的な考察の対象となることが少なかった学生時代の小松の動向を俎上に乗せる。第一章「モリ・ミノル『大地底海』を読む―「アジア的」なものの脱落をめぐって」は、当時の小松が文学同人誌活動の資金源としたという赤本マンガの創作に注目し、マンガ作品「大地底海」について検討を加えている。未来の世界を舞台に、地底人からの攻撃、アフリカ住民のヨーロッパへの引揚げ、核兵器の争奪戦を描くこのマンガに関して著者が注目するのは、日本という国家がアジアから切り離されたものとして表象されている点である。著者はここに、後年の梅棹忠夫が提起した『文明の生態史観』に通底する小松の世界観を見出している。興味深い新見と言えるが、このような世界観の妥当性や歴史的意義をめぐる著者自身の判断が留保されている点に不満が残る。日本とアジアの関係をめぐる戦後の諸言説を踏まえつつ、より批判的な検討を加えることが求められよう。また、マンガを表現方法として選択した小松のジャンル意識についても、より深い考察を要するだろう。

第二章「小松実の「転向」―初期習作「裏切」を中心に」は、一九五〇年代前半における小松左京の共産党体験を踏まえつつ、それを背景とすると目される小説作品「裏切」を論ずる。サルトルやカミュといった実存主義の文学作品の翻訳が、当時の小松の実作にどの程度影響を与えたかが論証されている。初出誌『現代文学』は、高橋和巳らとともに刊行した同人誌であるが、この雑誌を中心とした人脈とその動向についても検証されている。ただし、小松の共産党体験が有する意義については検討の余地が残る。また、戦後の実存主義文学、たとえば同人誌活動をともにした高橋和巳との関わりや、小松が高橋とは異なってSFに転じていった内的要因の解明については、今後の課題となろう。

第二部「「SF的想像力」と「日本論」の結合（一九六四年前後）」は、SF作家としての地歩を固める一方で、大阪万博への関与を契機として文化行政への参画を深めた時期の小松の動向を、創作と実践の両面から追跡している。第三章「小松左京と日本未来学―SFと並走する未来」は、京大人文研の知識人との交流、日本未来学会の創設から、大阪万博への関与とそのコンセプトへの懐疑、終末論に傾斜した一九七〇年代までの動向を丹念に辿る。引照されている資料も多岐にわたり、高度成長期の西日本を発信源とした知的言説を、小松を視点として捉え返す思想史のカタログとして貴重であろう。しかし、著者自身の評価軸に即してその思想史的意義が十全に語られるには至っていないように思われる。

第四章「ニッポンをめぐる妄想―小松左京の「SFルポ」における戦後日本像」は、第三章で辿られたような動向を背景とした小松のSFの実作『妄想ニッポン紀行』のうち、序章にあたる「瀬戸内海」を論ずる。ルポルタージュでありながらSFでもあるこの異色作について、掲載媒体となった雑誌『放送朝日』の特徴から説き起こし、高度成長を背景に「地方」に目を向けるようになった中央のジャーナリズムと知識人たとえば江藤淳に対して本作が投げかける批判、作中に配された三人の人物の思想的背景、東西の対立を軸に描き出された日本像の特質が作品に即して解明されている。第四章が配置されることによって、第三章で描かれた西日本知識人の人脈相関図に一定のパースペクティヴが与えられていると言えよう。また、第一章で指摘された梅棹忠夫『文明の生態史観』に見られる日本観との通底性が本章で改めて考察されるが、発表の時期が近接しているだけに本章のほうが説得的な議論を展開しえている。この日本観・世界観に関する著者自身の評価は、いまだ十分には打ち出されてこないため、いささかもどかしさが残ると言わざるを得ないだろうが、作品の主題を高度成長期の日本論の文脈に定位しえていることは評価できよう。

主査記載 氏名・印	樋口　大祐

第三部「『日本沈没』再読（一九七三年前後）」は、二章を割いて作家の代表作『日本沈没』を論ずる。第五章「小松左京『日本沈没』論Ⅰ―核時代の想像力」は、自然物理学的な日本の「沈没」を試行することによって、米ソ冷戦体制下における戦後日本の国際的立場、あるいは政治家や官僚制度のありかたを問い直すこの作品の「政治小説」としての性格を闡明する。さらに、作中に示唆される「核」のモティーフを洗い直し、作中に潜む核の平和利用への希望と核戦争の危機意識との葛藤が炙り出されている。作品が核の主題を前景には押し出されていない分、これを中心に据え直そうとする著者の解釈に牽強付会なところがあることも否めないが、潜在するこの主題をあえて可視化することによって、坂本義和の政治学的言説や大江健三郎の評論など、同時代の核戦争論・終末論の文脈に作品を定位することに成功している。本論文の白眉と言えよう。

第六章「小松左京『日本沈没』論Ⅱ―語り手をめぐって」は、作品が同時代に推理小説として評価されたことに着目し、語りの特質にアプローチすることによって本作のミステリ的性格を明らかにしようとしている。本作の語り手は日本の沈没という地球規模の出来事を活写しながら、その全貌を知悉しているわけではなく、むしろ事態を見通すことのできない作中人物の認識や議論に寄り添いながら叙述を展開していることを著者は指摘し、このような叙法にミステリ的な効果を見出している。興味深い指摘ではあるが、本章を独立した論考として見た場合、いささか手薄との誹りは免れまい。本章序盤で言及された、「SF」と「ミステリ」とがいまだ未分化だった時代状況を踏まえつつ、小松におけるジャンル意識の問題につながるような論点の設定が求められるのではないか。

ここで示唆されたようなジャンル論の問題に、角度を転じ、雑誌メディアに即してアプローチしているのが、第四部「日本SFの浸透と拡散」である。第七章「終末からの出発―雑誌『終末から』（筑摩書房）解題」では、『日本沈没』のベストセラー化と同時期に刊行され、小松の他に多様な執筆陣を擁した雑誌『終末から』についての検討が行われている。本誌の二人の編集者・原田奈翁雄と松田哲夫に注目し、前者が雑誌『人間として』以来の政治的左派の文脈、後者が『月刊漫画ガロ』の流れを汲むサブカルチャーの文脈を本誌に接合していることを明らかにしつつ、「終末」を主題に押し出した本誌のコンテンツを考察する。マンガに代表される戦後サブカルチャーと小松左京との関わりは本論文の主題のひとつであり、『終末から』の検討はそれに応じたものであると言える。ただし、本誌における小松の位置や、本誌連載作品である『おしゃべりな訪問者』の内容と意義についてはあまり語られていない。本章に関しても、そこに描かれた人脈地図を、小松を視座として立体化しなおす作業が期待されよう。なお、第四部には付録として『終末から』の執筆者一覧がまとめられている。

以上、本論文は全七章および付録一篇から構成されているが、最終章が雑誌研究にあてられた結果、小松左京論としての結論、とくにその「日本像」についての評価が棚上げにされてしまった点は、瑕疵と言わねばならない。また、ここで取りあげられていない重要な作品も多く残っており、小松論としてはいささか手薄であるという評価も否みがたい。しかし、学生時代の小松の初期創作に光を当てたこと、代表作『日本沈没』に説得的な解釈をもたらしたことは、本論文の大きな成果として特筆されよう。また、『放送朝日』や『終末から』といった雑誌メディアや京大人文研の知識人との関わりといった、人的ネットワークのなかに小松を位置付けたこと、小説に限らずマンガ、SFに限らずミステリとの関係に関しても示唆を与えていることは、小松という作家の多様性を把握しえているという点で評価されるべきである。

日本文学研究において、小松左京に関しての本格的なモノグラフとして著された博士学位論文は、本論文がその第一号となるだろう。上記のような評価に鑑み、本審査委員会は、論文提出者・徐翌氏が、博士（文学）の学位授与にたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	樋口　大祐	副　査	助教	有澤　知世
副　査	教授	長坂　一郎	副　査	日本映画大学 准教授	藤田　直哉
副　査	准教授	梶尾　文武			